奥飛騨／高原川・沢上谷（そうれだに） ＆ 御嶽山／鈴が沢

遡行日：08 年５月３日～４日
メンーバー：三井（Ｌ／記録）、島田

名古屋ＡＣＣの年会報は僕には“沢探し“の貴重な資料だ。
過去にもその情報で行った沢が幾つかある。
今回の２本の沢も以前、年会報で知って「行ってみよう。」と思っていたものだ。
どちらも日帰りの沢で、遠いので中々機会が得られずそのままになっていたが、今回漸く実行の運びとなった。

［5 月３日］

沢上谷

沢上谷はこれで“そうれだに”と読む。
ある記録に「西日本で一番のナメの素晴らしい沢」とある。関東の沢屋にはあまり遡行されていないようだが、中京や関西ではかなりポピュラーな沢のようで、Web 検索すれば何件もヒットする。その写真を見れば確かに一度、目にしてみたい、と思わせるものだ。さて、実際にはどうか。

前夜出発。
順調に車を飛ばし、入渓点のある県道に入ろうとすると、なんと「工事中全面通行止め」の看板があり、ロープを張って遮断している。夜中の事、ジタバタしても仕方ないのでその前に車を止めて仮眠。
朝食を食べていると一台の車が我々の前を通りすぎて行った。どうも通れそうである。我々もロープをはずして進入する。
どこで工事中か、と思いつつ進むと２台ほど釣師のものだろうか、車が止まっている。夜中に進入したものだろう。我々も安心して車を進め、入渓点の橋の脇を入ると小広くなった所があり、駐車させる。
手早く仕度を済ませ入渓する。
どうという事も無い平凡な小沢が続いている。
１０分ほど進むと、右岸から枝沢がナメ滝を架けて流入している。
その枝沢を 10 分ほど遡ると、8ｍほどの滝に続いて「五郎七郎滝」と呼ばれるナメ滝が現れる。
滝の前後もナメ状なので落差が表し難い。（かの会報では 50ｍと表記されているが滝らしい部分は半分くらいだろうか。）
滝はスラブの岩盤の上を優美に瀑水を流している。中々のものだとは思うが、特段に素晴らしいとも言い難い。
すぐに引き返し、本流を進むとやはり１０分ほどで又、右岸に枝沢。この奥に岩洞滝がある。
岩洞滝は赤茶けた 30ｍほどの垂直の岩盤から直線的に瀑水を落としている。「なるほどね。」
また本流に戻り、先に進む。所々ナメが現れるも概ね河原で、まだ売りになっている素晴らしいナメの沢という感じはない。
水流が右岸寄りになり、側壁を突っ張りで越えると突然目の前を塞ぐような大滝が現れる。「蓑谷大滝」である。
落差は35m、スラブの壁からサラサラと水流を落としていて、在り来りな表現だが女性的な優美な滝、と言えばいいか。
島田さんは、「吾妻の大滝沢の大滝を少し小さくしたような滝ですね。」と言う。
（なるほど。そう言えなくもないが大きさも形も大滝沢のは別格だね。）
この滝の巻きは右岸、左岸どちらも可能だが、一般的には左岸から巻かれている。で、僕らも左岸を登る。少し右寄りに登っていくと、かなりしっかりした杣道が現れる。それを辿り、右に回りこむとルンゼが落ちているのでそのルンゼを下るとぴったり、滝の落口。ここからが「ナメの沢上谷」の本領発揮だった。
素晴らしいナメとなり、それが延々と続いている。コンクリートで固めたような平らな沢床の上を水流がサラサラと流れていて、その上をヒタヒタと歩いていくのは楽しい。

島田さんが、「余り早く行きたくないですね。」と言う。「確かに…。」
やがて二俣となり、それぞれ滝を落として両門の滝となっている。
右の沢が本流で、水流の横に固定ロープが垂れている。マー、無くても登れるのだが、有り難く使わせてもらって登る。
一旦、ナメが途切れて石のゴロゴロした河原となるが、直に再びナメ床に変わる。ただ沢幅が狭まり、源頭状の雰囲気となってきている。
そのナメの小沢をヒタヒタと歩いていくと二俣となり、小橋が架かり林道が通っている。
と、丁度そこに車が走ってきた。運転手が怪訝な顔をしてこちらを見ている。
無理もない。ヘルメットを被り、変な道具を身につけた男女が川の中を楽しそうに歩いているのだから怪しげに見られても不思議ではない。
僕たちもこれ以上歩いても仕方ないので遡行は終了、その林道に上がり、県道を下って車に戻った。

・・・・・・・・

一旦着替えて次ぎの沢、「鈴が沢」に移動すべく車を走らせる。
僕は計画の段階では鈴が沢まで 100Ｋｍ、３時間で移動できる、と見込んでいたのだが甘かった。山間地を縫って上り下りするような道が続き、実際は 130Ｋｍ、5 時間を要して漸く鈴が沢林道の「鈴が沢橋」に到着。
橋の先にはがっちりした車止めのゲートがあり、手前の小広くなった所にテントを張り明日に備える。

・・・・・・・・

余談だがこの辺りコンビニが少ない。
130Ｋｍも走ってほんの数軒だった。
ほんの数キロ走ればすぐコンビニが見つけられるところから来ると異常な気がするほどだ。
現地で食料を調達するつもりなら注意したい点の一つだ。

［5 月 4 日］

鈴が沢・東俣遡行～中俣下降

“御岳きっての美渓”これがかの会の会報に載った鈴が沢のキャッチコピーだった。

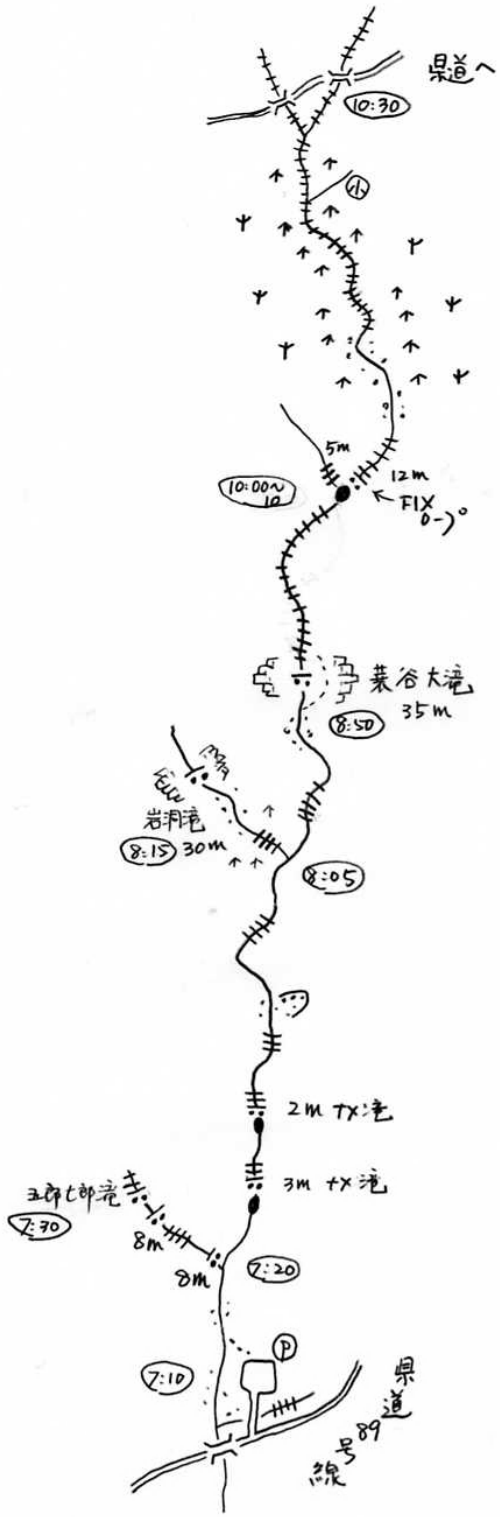
ヒザと腰を痛めている島田さんは、計画の段階から「鈴が沢は無理かも…。」と言っていたのだが、やはり残念ながら今回は無理、との事で僕一人での出発となる。美渓好みの島田さんとしては残念至極の事だろうけど…。

車止めのゲートを越えて林道を暫く辿ると、20 分ほどで「三沢橋」にでる。トポに従ってここから入渓する。
単独での沢は何年振りだろうか。やはりパーティーとは何処となく違う緊張感があって、それはそれでいい。
入渓するとすぐ中俣との二俣（さらに左に小沢があるので三俣状だが。）となるが、東俣を進む。
間もなく 5ｍばかりのナメ滝が現れる。右から快適に越えると、続いて 4・5ｍの滝。しかし、これは越えられそうにない。やむを得ず右の斜面の笹藪を漕いで再び林道にでる。林道から沢を覗きながら歩くが、見える範囲では河原状が続いているだけのようなので、次の「東俣橋」から入渓の計画でもよかったのでは、と思う。
橋から再び沢に入り遡る。
ナメ混じりの河原を遡っていくと、前方に大滝が現れる。三段 30Ｍと言われている直瀑で、一条の細い白布をたらしたような瀑水が凛とした佇まいをみせていて素晴らしい。
さて、この巻きだが下段を右から登って偵察するが、名古屋ＡＣＣのトポでは右岸を巻いている。しかし右岸は見る限りフリーソロではエグい。（後日わかったのだがもう少し下流からなら容易に巻けるようだ。）
左岸を見るとルンゼがあり、そこが何とかなりそうだ。取り付こうとすると瀑水の右壁に沿って斜上するルートを見出した。取り付いて少し登ると、壁の基部に上がる手前が 5・6

ｍのグズグズの土壁になっていて、スタンスを切ってみるがどうもヤバイ感じ。崩れれば一気に取り付きまで落ちる。痛かった、だけでは済まないだろうね。
やはりここはロープを出すべきだろう。
ロープの末端を足元のしっかりした潅木にフィックスして、目の前の小指ほどの潅木に気休めのランニングをとって、プルージックでロープと身体を繋ぐ。
慎重にジリジリと登り何とか壁の基部に上がりヤレヤレだ。笹薮帯に入り、壁の上にでて笹薮にすがって下り漸く落ち口の上にでた。
3ｍの滝を右壁から越えると、この辺りから鈴が沢の魅力が全開となる。そこには神経をすり減らす様な滝も、ゴルジュもない。両岸は岩畳になっていて、その間を水流が蛇行して流れ、ナメとナメ滝が途切れず続いている。
五月晴れというよりもう初夏と言っていいような青空の下、僕は鈴が沢の素晴らしさを全身で享受して、ひたすら遡行して行く。沢屋冥利に尽きる…。
やがて沢は開け、ゴーロ状となる。沢の両岸の壁際には岩に混じって雪渓の残骸が転がっている。
もう源頭の雰囲気。直に三俣となる。
正面の沢のすぐ奥にはトポに２段30Ｍと書かれている滝が見える。
僕はスタートする時、今回は源頭に達したらＵターンする事も選択肢の一つに考えていたのだが、幸い時間はまだ早い。沢登りは本来、稜線に達して完結となる。
正面の沢はその滝を巻いたあと密藪漕ぎがあり、時間を食うようだ。しかし、左の雪渓が残っているガレ沢を登れば、藪漕ぎなしで中俣の下降に入れるハズだ。Ｕターンするよりも早くテントに戻れるベターな策だろう。
僕は雪渓の残った沢を詰めていき、労せず雪原の上に立った。無雪期なら賽の河原と呼ばれるような石ころの台地だ。
右を見ると御岳が我が身の無残な崩壊部分を隠すことも無く晒して、孤高の姿で聳えている。
ここからの御岳を目にする事は多分、二度とはないだろうと思いつつ、僕は左の小三笠山を回り込むようにして、雪に隠れだ倒木に足を捕られながら斜面を下って行き、中俣に下りたった。
中俣は何もない沢で、林道が上に延びている事もあって、小一時間ほどの下降でその林道にでた。
更に中俣を下降する手もあるのだが強いてそうする沢でもなさそうなのでその林道を下る。
鈴が沢を予定通り遡行できた満足感に浸りながら足早に林道を下って、島田さんの待つ車に急いだ。

・・・・・・・・・・・

今回の二つの沢は、どちらもナメ主体の美渓で、マー、よかったと思う。
「沢上谷」は流程が短く、すぐ脇を車が通る道があるので沢登り、という感覚は薄い。某会報には“観光沢登り”の表現もあるが、確かに滝とナメを見物する物見遊山の旅、といった雰囲気が無くはないかもね。
「鈴が沢」は本当に素晴らしい。
核心の大滝を越えればナメとナメ滝が飽きるほど続き、沢登りの楽しさを満喫させてくれる。
“デート沢”なるしょうも無い言葉は置くとしても、別に異性と一緒でなくても初心者にも、ベテランにも楽しめる沢である事は確かだ。



08. 5. 3
奥穂高岳／高原川・沢上谷